

頭のおかしい爆裂コンビ

ロリコンの人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

頭のおかしい主人公が頭のおかしい爆裂娘と爆裂魔法をばら撒く

話（要約）

目 次

～EXTRA～エクスプロージョンじゃないよ？

日刊ランキング記念の i-fストーリー的な？「俺と彼女とエクスプロージョン（仮）」第1話マイホームエクスプロージョン — 1

「俺と彼女とエクスプロージョン」第2話。エクスプロージョン
ガール——爆裂娘 — 5

本編
要約すると、長時間居座り無理やりスキルを2つ手に入れる話。
9

要約すると、スキルの説明回とめぐみんとの出会い、まあ読まなくて支障は無いかもしない。

要約するとめぐみんが門番に怒られるのと、めぐみんにお金を借りるて、転生者だと話す話。

要約するとめぐみんとパートナーを組み、宿が馬小屋という事にカルチャーショックをうける話。

要約すると要約すら読む価値のないクツソ長い前置きと複製チートによる金策の馬小屋脱出大作戦その1。

要約するとめぐみんにセクハラをして金的をされ全く進まない申し訳程度の馬小屋脱出大作戦その2とシリアルアス回。

要約すると茶番で大嘘。そして馬小屋脱出大作戦その3じやなくて恋愛回。

要約するとちやんとした馬小屋脱出大作戦 — 39

要約すると衣装選びにめぐみんレビュー — 43

要約すると筋トレとめぐみんヌルヌル丸呑みプレイ — 48

要約すると川でめぐみんが全裸で水浴びと魔剣使い — 52

要約すると「魔剣使い死す!!」エクスプロージョンは最強つて訳よ

要約すると、めぐみん全裸卒業に追い剥ぎめぐみん ————— 62

要約すると、魔剣の代わりに家を買わせる話。家を買う男その¹。

要約すると、魔剣の代わりに家を買わせる話。家を買う男その²。
と、ベルデイアの見せ場。

「EXTRA」エクスプロージョンじゃないよ？

日刊ランキング記念の「ifストーリー的な？」「俺と彼女とエクスプロージョン（仮）」第1話マイホームエクスプロージョン

「はあ……」

通学途中、朝から出るため息。理由のないため息というのもあるのだろうが、このため息には理由がある。その理由とは一緒に通学をしている1人の女の子、紅野恵（コウノメグミ）のせいだ。

思春期真っ盛りの男子高生が可愛らしい後輩女子と通学をして、「なぜ」と思うのかもしれないがこれにもしつかり理由がある。

この子、紅野恵…通称「めぐみん」は、現在巷を騒がせている連続爆弾魔なのだから…。

え？ 嘘をおつしやいって？ そう思つた人手を挙げなさい、先生怒らないから。

うん、信じられなくてもおかしくは無いとおもう。

学年でトップを争える程の成績。

学校中の男子生徒の目を引き付ける程の可愛しさ。

そして…、1部の「マニア」からの支持の熱い中二病…。

自分もこんなに可愛い後輩が爆弾魔な訳がない！！つて最初は思つていたさ。

でもね、そんな甘い考えはあつという間にエクスプロージョンしたのさ、我が家家の崩壊を見て、ね。

運命の日、要は家が爆破された日、俺は普段より遅く帰つてたんだ。

帰りのバスの中、暇つぶしにネットニュースを見ると気になる見出しがあつた。

「連續爆弾魔、再び犯行か」

連續爆弾魔……、コイツは自分の住んでる街、紅魔市を拠点に犯行を重ねている爆弾魔だ、死者や怪我人をを出さずに建物だけを破壊する迷惑な奴。そいつがまた事件をおこしたというみたいだ。

この爆弾魔、家に侵入してから爆弾を設置するので、テレビ等で戸締まりをしましようと騒がれていたのが少し懐かしい。

自分は戸締まりをしつかりしているので大丈夫……、だと思いたい。

それにして、この街も物騒になつた物だ。この爆弾魔があらわれるまでは、パンダがどうのこうと騒いでいた。

パンダには欠片も興味はないが、あの平和な頃が懐かしい。やらな

ら他の街でやつて欲しかつたものだ。

つと、考え事をしてる間に着いたみたいなので、バスのを降りる。バス停からの帰り道、今日は何故かすこしザワついてる、何かあつたのだろうか。

嫌な予感がする。

すこし、歩調を早めて足早に家に向かつてかける。

家との距離が縮まるにつれ人の密度が上がつて行き、感じた嫌な予感も確信へと近づいて行く。

ある程度進んで行くと次はスマートフォンをで何かを撮つている人達が爆発的に増える。そんな人混みを搔き分け進むと、そこにはあるのは見慣れたいつのも景色、と、……1つの異物。動悸が早くなり、膝がガクガクと震え崩れ落ちる。

……要約しよう。

我が家がエクスプロージョン。

冗談でも何にでもなく、親から受け継いだ愛しのマイホームは灰燼と化していた。

「……ア、アハハハハハハハ……」

人前だというのに変な笑いが止まらない。

異常すぎる事態だからなのか、妙に冷静でいられる。

「これからどうしよう…」

思わず口からそんな言葉が漏れる。

両親は二人とも既に死去していて、高校生という身で一人暮らしの自分。バイトや両親が遺してくれていた遺産のお陰で暮らしては行けたが、それも家があつての事、家が無いからってホテル暮らしをしたら金なんて一気に吹き飛ぶ。

それに家中に居た嫁達が消えたのも地味にツラい。

そして、立ち上るとそのままフラフラと歩き出す。

答える出ない事を考えながら。

あんな光景を見たからだろう、喉が乾いたため飲み物を買おうと近くのコンビニへ立ち寄ると、そこには6月だと言うのにコートを深く着込んだ小柄な人物が居た。

普段の自分なら気にせずにそのまま飲み物を買う所なのだろうが、今夜は違う。

家が爆破され、明日のわが身は何処へやら。命の危機に瀕した自分の感は歴戦の兵士の様に冴え渡っていた。

そんな自分の感が囁く。

「犯人はコイツだと」

そして、自分は喉が乾いていたのも忘れソイツに向かって駆け出す。

「ひっ!!」

いきなり自分に向かつて駆け出した俺にびっくりしたのだろう、相手も走つて逃げ出す。

一瞬聞こえた声が女の声だつたが気にしない、我が家を爆破したやつには老若男女問わず鉄拳制裁。

相手ノ顔が腫れ上がりつても殴り続けるつもりで追いかける。

相手への猛烈な殺意によるブーストを受けた俺の脚力は普段とは比べ物にねらないほどの最高速度に到達し、あつという間に相手を追いつく事に成功する。

もう、最初にあつた冷静さなど何処にもない、爆破された自宅に集まっているのだろう、周りに人が居ないのをいい事にその小さな背中

に向かって飛び蹴りを食らわす。

もちろん命中。

飛び蹴りを食らった小さな背中は女の子が上げてはいけないような力エルの潰れた様な声をだし、倒れ動かなくなる。

もちろん気にしない。

「殺したか……？」

ゆつくりと倒れた奴に向かいひつくり返す。

「……ッ、コイツは……」

フードの中から除く顔は転んで出来た傷があつてもよく分かる顔、自分の通う高校の後輩、紅野恵だつた。

「俺と彼女とエクスプロージョン」第2話。エクスプロージョンガール——爆裂娘

「……」

フード中から見知った顔が出てきた事に驚き固まるが、直ぐに家を爆破されたという事を思い出し怒りがふたたび込み上がる。

「さて、どうしようか…」

家があれば連れ込むのもアリだが、爆破されており不可能。ならば：

「トイレか」

俺は近くの公園にある、多目的トイレにコイツをおぶつてそこで訊問する事にした。

公園までの道程は幸いな事に人はいなく、コートを来た少女をおぶりながら歩いていても咎められる事は無く、無事にトイレの中に連れ込むことができた。

「さて、まずは生きてるかの確認だな」

コートを脱がし首筋に手を当て脈拍を確認する。トクン、トクン、と手に感触が伝わる。

「生きてはいるようだな…」

取り敢えず、生きている事が分かつたので逃げられないように縛る事にする。

ズボンのベルトを外し、紅野の腕を手洗い台のパイプに縛り付ける。

「改めて見ると酷い絵面だな…」

気絶した少女を公園の多目的トイレに連れ込み、逃げられないように縛り付けてる。

「……これじやレイプ犯だな」

まあ、相手は家を爆破しているので遠慮はしないが。

スマホで時間を確認すると、意外と時間が立っているのが分かる。

「はあ……」

ため息について、便座の蓋を閉めその上に座り、紅野をじっと見てみる。

「可愛いんだけどなあ……」

冷静になり改めて、紅野の事を見てみると魅力的に見える。

黒く艶のある髪に、艶のある美しい肌。目や鼻、口と言ったパーツも非常に良く整つており、小柄で控え目な胸を持つた身体が更に魅力を引き立てて：

「……ッ!! 何を考えてるんだ俺は！」

ボーッと見つめていたら引き込まれそうになる。

乱暴に脱がしたからだろう。少しほだけた胸元も…：

あれ?

怒りのままに飛び蹴りを食らわし、トイレへ連れ込んだのはいいんだが。もし、彼女がただ怪しいだけの人で連續爆弾魔でなければ…。

あれ、この状況不味くね?

人違いだったら普通に明日からレイプ犯じやないか！

人生終わりだッ!!

「ん、ここは何処つ……、あれ私縛られて……？」

目を覚ましてしまったようだ。

ここからが勝負、か。取り敢えず弱みを見せないようにしなければな。

「おい、爆弾魔。良くも家を爆散させてくれたな！」

「お、私を縛つてここに連れてきたのは、水神紅夜さん、貴方でしたか」

「は？お前なんで、俺の名前を…」

おかしい、縛られ、トイレに連れ込まれているという普通なら恐怖で怯えているはずの状況で、冷静で居られること。それに同じクラスからまだしも、学年が1つ上の俺の名前を知ってるもおかしい。紅野とは違つて俺は人気者と言う訳ではないし。

「調べましたからね。貴方の事。私、人は殺さない主義ですし。巻き込まないよういつも徹底的に調べてるんですよ」

「じゃ、アンタがやつたって事で良いんだよな？」

「ええ、今日もちゃんと爆破させられて良かつたですよ。やつぱり爆発させるなら夜が良くないですか！」

「知らんがな。それよりどうしてくれるんだ？俺の家、財産が吹き飛んだんだが、お前のせいだ文無しだ。」

「あ、えつとすいません？」

「……なあ、巫山戯てるのか？」

「え、どうしてですか？」

ポカンとした顔をする紅野。全く状況が分かっていないという様子。

大丈夫か？コイツ。

「お前さ、人の家吹き飛ばしておいて、ごめんなさいで済むわけないだろ、普通に考えて」

「あー、確かに冷静に考えたらそうですね」

納得した顔で1人で頷く紅野。

「はあ、もういい。取り敢えずお前が爆破したんだな？」

「くん、と頷き肯定する紅野。

「よし、ポリに通報だ」

家に関しては最悪、男友達に居候でもさせてもらおう。

「あああ！ちょっと待つてください！通報は無しで！ステイ！ステイ！ステーイ！」

「は？意味が分からんぞ。爆破されたんだぞ？犯罪だぞ？普通に通報するからな？」

「ま、待つてください！通報されたら私が捕まっちゃうじゃないで

すか！」

「ああそりゃよ！お前みたいにイカれた爆発女を捕まえてもらうために呼ぶんだよ！」

「嫌ですよ、まだ捕まりたくないです！」

縛られたままイヤイヤと騒ぐ紅野。その様子はまるでお菓子を買つてもられない子供のよう。

「なあ、通報されたくないって言われてもな、こつちは家を潰される訳なんだよ。通報するしか無いんだよ」

「えっと、家があれば良いんですね？」

「は、え、まあ、家があれば嬉しいけど…」

コイツ…、何を言い出すんだ？家がどうこうと言つても用意出来るはず無いし…。でも、この爆弾魔なら何かとんでもない事を…

「私と一緒に住みますか？」

「は？」

聞き間違えだらうか、彼女は今なんと…

「だから！私と一緒に住みますか？」

ああ、どうやら聞き間違えなんかではなかつたようだ。

本編

要約すると、長時間居座り無理やりスキルを2つ手に入れる話。

人類は平等だろうか。否、そんな事は無い。有史以来人類が平等であつたことなど全くと言つていいほど無いだろう。産まれる時点で既に「差」は出ているのだから。

だが、もし何か1つ挙げるのだとしたらそれは「死」。

富める者、貧しい者、この世に生命として誕生した時点で「死」という終着点は決まつていて、人生は一度きり。セーブもロードもできない、あるのはリセット機能だけ、しかもそれは死ぬ事だ。二度とやり直せない。

ゲームだつたらクソゲー決定だ。

けれども、それも今日で終わり。

だつて「転生」出来たのだから。

一度しかない人生。これを2度も味わえるなんて、しかもこれが選ばれた数少ない人達の特権だなんて。

ああ、やっぱり世の中は不平等で不公平だな。

「あのさあ、「今の自分、カツコよくね?」とか思っちゃつてモノローグしてる所で悪いんだけどさ!早くチート決めてくれない?」

今、目の前に居る青い髪の美しい女性はなんと女神様!（棒）

女神の名前はアクア、この転生の間を担当している女神であり、今から転生する世界に存在する宗教の1つのアクシズ教の女神様だとか…。

まあ、どうでも良いんだけどね。宗教興味無いし。目の前に一応自分を生き返らす事のできる女神様が居るので神様は居るんだなあと理解する事は出来る。

けど、この女が女神様だという事実を俺は認めたくない。
理由としては…、コイツが一般的に言われる駄女神つて奴だからだ。

「ねえ、アンタさ凄く失礼な事考えてるわよね。だーれーが！駄女神よ！駄女神！私から溢れるこのオーラと美しさが分からぬわけ？」

分からん。全く持つて分からん。

女神とはもつと神聖でおしとやかで美しいものでは無いのだろうか。今のコイツはそれから1番遠く離れた所に居るのでは無いのだろうか。

不思議と最初は輝いて見えた青色の髪が今はくすんで見える。

「おしとやかねえ…、アンタさまさかエリス見たいなのが趣味なの？」

「ん、エリス？」

エリス…、一体どんな女性なんだろう。名前からしてアクアと違つて神聖な響きがする様な…。

「なあ、そのエリスつてのも女神なんだろう？どんな人なんだ？」
「エリスの事？エリス教とか言う硬つ苦しい宗教の女神で、通貨の単位にも使われてて調子に乗ってる女神よ！」

「はあ…」

全く分からん。

「もつとなんか無いのか？」

「そうねー、あ！1つ有るわよ！」

「ほほう、で、それは？」

「胸にパッドを入れて傘増ししてるのよ」

は？パッド？パッドつてあるの？

「ええ、そうよ、しかも下界にあるエリスの像は胸が大きいのよ」「そうか、だが、俺は貧乳好きだぞ。大きいのも良いがな。特に自分の胸の小ささを気にしてパッドで傘増ししているのが萌えポイントだな」

ちなみに巨乳と貧乳が2人あわざると最強。異論は認めない。

「あー、忘れてたわー、アンタの居た国つてあの変態国家じゃない」変態国家とは失礼な…。

まあ、事実なんだがな。

ちなみに俺もその変態性を愛している1人だ。

「ねえ、あんたつてロリコン？」

「何故分かつた！？流石女神様だな…」

全てを見通す女神の力…、恐ろしいわ！

「そんな事で女神としての力を認められても全く嬉しくないわよ！」

「少し評価上がつたからいいじゃんか」

とりあえず、評価は汚水から水道水レベルまで、美味しい天然水までの道程は長いぞ！頑張れアクア！

「はあ、まあいいわ、私の凄さは後でゆっくり教えてあげるから！そんなんことより！チートよーチートは決まったの？まさかチート要らないなんて事は言わないわよね！アンタみたいな貧弱な日本人なんかチート無しで行つたらすぐに死ぬわよ！」

「はあ…」

と言つても、チート決めるの難しいんだよな…。色々よりどりみどりでき。

「言つとくけど、チートは2つあげられないわよ！そういう事する

と私が上司に怒られるのよ！」

あー！もう！こんなに時間がかかるつてタダでさえ怒られる事が決定してるので！とアクアは頭をガシガシと搔きむしる。

どうとう女性らしさも無くなつたな。

…まあ、今更だがな。

「あのねえ！アンタさー！どれだけ長くここに居るのか分かつてんの
！？1週間よ！1週間！」

「チートが決められないから仕方ないじやないか、あとお前もオレ
と一緒にゲームとかして楽しんでたよな？」

「それはそうだけど！アンタのせいで上司からの電話鳴りまくりな
のよ！怖くてもう出れないじやない！」

「知らん！俺は悪くないぞ、そもそもゲームは俺がチートの本読ん
で探してる時にお前が誘ってきたんだよな？」

ちなみに、アクアのゲームの腕は結構凄かった。

「まさか！アンタ私に惚れたとか！」

「断言するが、ないぞ」

とうとう頭までおかしくなつたのだろうか。この女に惚れる要素
など1つも無いのに。

「あー！分かつたわよ！分かつた！2つ！2つよ！2つあげるから
早く転生してよ！」

「まじか」

「しかた無いじやない！後ろにも沢山詰まってるし、無理やり送つ
たら大変な事になるし…。電話だつて鳴り止まないのよおおおおお
おおおお！」

そのまま、泣き出す女神アクア。はつきり言つて汚い。

「よし！2つなら直ぐに決められるぞ！」

「ほんと!?」

「ああ、勿論これ以上ここに居るのも可哀想だしな」

可哀想だなんて、全くの嘘だがな。そもそもこれを放つから狙つて
たのだ。

「ぐすつ…アンタ良い奴ね…。で、何にするの？」

俺はポケットに入っていたティッシュをアクアに渡しながら答える。

「この複製スキルとアイテムBOXチートかな」

そう答えるとアクアはビックリした顔になる。

「そ、それだけでいいの!?」

「ああ、これが俺にとつてのベストだ」

「そう、なら良いんだけど…」

そう言うとアクアは渡したティッシュで顔を綺麗になると、最初に出会った時のようなキリツとした感じになる。

「それじゃあ、あなたに水の女神アクアの名において、能力をさしきるわ。貴方に祝福を」

こうして俺は異世界で2つのチートを手に入れる事が出来、アクアは天然水に格上げしたのだつた。

要約すると、スキルの説明回とめぐみんとの出会い、まあ読まなくて支障は無いかもしねない。

さて、チートを2つ無事にゲット出来た訳なんだが…。よし、想定通りで結構使える。

まずはアイテムBOXチート、一般的なアイテムBOXと一緒に感じで何でも入るし、重さもなくその上時間が止まるという優れもの。入れたものは頭の中でリスト化！物忘れの多い貴方でも大丈夫！と言った感じだ。

形はシンプルな銀の指輪だから、デザインも変に目立たずいい感じ。

そして、もうひとつスキル「複製」はかなり使える。これがれば大富豪間違いなしなスキル。試しに道端の石をコピーすると成功、何も無いところに生み出される全く同じ形の石を見て凄くテンションが上がった。

さて、何故このスキルを選んだのかと言うと理由は1つ！このスキルを使えば！祖母の作るクツキーのように

通貨を増殖させることが出来るのだ！

本物と全く同じ物が作れる訳だから偽装だとバレる心配はなし！まあ…、不自然にならない程度にしないといけないし、働いたりもしないとどうが少なくともお金に困る事は無いだろう。

だが！この複製スキルはただ物品を複製するだけではなく、同意を得た相手からスキルを一つだけコピーする事が出来るのだ！

ふう、スキルの事でテンション上がったのは良いがまずはここは何処なんだ？

さて、人の居る場所を探してみると歩いていると、突如「ドガアアアアアアアン！」と森全体を震わす様な轟音が鳴り響く。

「わああああ！」

情けない声を出してしまった。ついでに尻もちも。まあ、誰も見てないから良いけど。

とりあえず何も手掛かりもないし爆発の起こつた所へ行つてみようか。

さて、爆裂の音が聞こえた方へ向かつてゐるんだが、目の前に魔法使いつぽい格好の小柄な女の子がうつ伏せで倒れている。

どうしようか。

人もこの子以外に見つかってないし、とりあえず起こしてみよう。

「おーい、生きてるか？」

身体をユサユサとゆする。

すると、女の子はいきなり身体をガバッと起こす。

「うお！なんだ!?」

すると、女の子はその今にも襲いかかりそうな勢いとは裏腹にへなへなと座り込む。

「あの…、冒険者の方ですよね…。街まで連れて行つて貰えませんか？」

「お、おう。」

うつ伏せになつていた時には分からなかつたが、凄く可愛らしい子だ。

…ただ、眼帯をしているのが気になるけど。

「なあ、その前にいくつか聞きたいことがあるんだがいいか？」

「ええ、まあそれくらいはいいですけど」

「こゝら辺で大きな爆発があつたんだけど知らないか？」

すると、女の子はいきなり顔から汗をダラダラと垂らし始める。

「は、ははは。爆発ですか。し、知りませんね…。何処かの誰かが破裂魔法でも打つたんぢやないですかね」

「オイ、確実にお前が原因だろ。なんだそのバレバレの嘘は。つかなんだよ破裂魔法つて。異世界だから魔法があるのは分かるけどさ。」

「なあ、確実に何か知ってるよな」

「い、いえ…。知りませんよ？」

何故に疑問形…。もうコイツで決定だろ。

「なあ、俺はこの世界に来たばっかりだがな、さすがにアンタがなにかやらかしたのは分かるぞ？」

「この世界？何か紅魔族的に見過ごせない台詞が聞こえたんですがか！」

いきなり目が紅く輝き出す女の子、ちょっと怖い。

「あー、それかい。話しても良いけど、ここら辺大きな爆発が起きてるし危険そุดから今は無理かなー」

「うう…。分かりました！話しますから！話しますから教えてください！」

よし、掛かつた。

「で？何があつたんだ？アンタが何かしならに関係してるのは分かつてるんだが」

「爆裂魔法を打つたんですよ」

「爆裂魔法？何だそれは？」

「ばー！爆裂魔法を知らないんですか！」

「ああ、知らないな。そもそも俺もいた所に魔法なんて無かつたぞ」「魔法がない？それはどんな所何ですか…。いえ！今はそれより爆裂魔法についてでしたね！」

そうだけどさ、なんていきなり元気になつたんだろ。まさか異世界の人たちみんなこんな感じ？そうとは思いたくは無いんだが、女神がアレにだつたしな…。

「爆裂魔法とはですね…。数ある魔法の中で最強の魔法です！極め

る事が出来ればドラゴンだつて屠る事が出来ますよ！」

「ほう…。じゃあ、さつきの大きな爆発が爆裂魔法か？」

「そうですよ、まさか貴方も爆裂魔法に興味があるんですか！」

「お、おう！結構あるぞ。あれだけの破壊力を自分の手中に收められるのは興奮するしな」

すると、女の子がいきなり腕を掴む。

「アアアアッ！痛い！痛い痛い！」

何コイツ、こんな細い身体してんのにスゲー力が強いんだけど。
「す、すいません。理解者が得られたのに興奮してつい…」

「お前…ボツチなのか？」

「ハア!? ボツチはゆんゆんですよ！ 私は…まあソロですけど…里には友達いますし！」

誰だよゆんゆん。そして、ボツチなのかよ。

「あー、ソロって事は冒険者とかなのかな？」

「はい、そうですけど。こちら辺は魔物が出るので冒険者ぐらいしか近づきませんよ？」

「はア!? おま！ それを先に言えよ！ 近くの街は何処にある!?」

「い、いきなりどうしたんですか？ これから爆裂魔法について語り合おうかと…」

「そんな事してる暇無いんだよ！俺冒険者なんかじやなからな！ 逃げないと！」

「はア!? そ、それをどうして早く言わないんですか!! 爆裂魔法を極めるまで死ぬなんで絶対に嫌ですよ！ ほら！ 早くおんぶしてください！ 私は爆裂魔法をうつて魔力切れなんですよ！」

何だこの幼女。

「ああ、もう分かったよ！ ほら！ おぶるから！ 早く街の方向を…」「グルルウ…」 おい。

「ええ、分かつてます。そして、街はあっちの方向です。」「よし！ 逃げるぞ！」

要約するどめぐみんが門番に怒られるのと、めぐみんにお金を借りるて、転生者だと話す話。

さて、無事にトラブルも無く森にいる魔物から逃げ切り、始まりの街アクセルに着いた俺達だつたがまだ終わつた訳では無かつた。

連れの女の子が怒られているんだ、門番さんに。

どうやら、さつきの爆裂魔法のせいで怯えた魔物が結構な数来たらしく、冒険者と門番が対処に追われていたようだ…。まあ、冒険者は何時のものこのと苦笑いしていたようだが…。

はあ…、マジでこの異世界不安になつて來たぞ。女神はあんなんだし、この口りつ子は街のみんながキチガイ扱い。まともな人が居ないわけでは無いようだけど。

ん？ そういう自分はマトモのかつて？ 人のやつた事に巻き込まれると、自分から仕出かすのは大きく違うんだぜ？

それにしても説教が長い。呆れるほど長い。これほど長い説教は見た事がない。校長のムダな朝礼の方が楽に思えるほど。

「あの…、とりあえず俺だけでも入れて貰えませんかね？ コイツはもういいんで」

ずっと何もせずに説教されてるのを見るのは辛いぞ。

「ああ、すいません。つい説教に夢中になつてしまいまして、それはアクセルの街へよう「待つてください！」

おい、そこの小娘よ。嫌な予感がする。黙つていてくれ。

「み、見捨てる気ですか！一緒に爆裂魔法を極めると誓つた同士を！せつかく貴方のために見せてあげた爆裂魔法なのに！」

オイ、確かに爆裂魔法の魅力は分かるよ？ でもさ、極めるとか言ってないし、俺も戦犯に追加してんじゃねーよ！

そして、門番さん。そんな目でこつちを見ないで下さい。

「あの、この子の言つてる事はでた「酷いですよ！ やるだけやつたらポイなんて！」

あ、これはマズイ

「「門番さん！聞いてください！」」

「…、あ、ハイ、ワカツテマス。ドウゾオフタリトモオハイリクダサイ。

イ。」

……ああ、終わった。

「なあ、お前さ、俺を危険人物にして楽しいか？」

周りの目が凄いんだ。ロリコンだとキチガイだとか。

「仲間が出来て嬉しいですよ！一緒に爆裂魔法を極めましょう！」

「あ、危険人物つて自覚はあるのね」

「そんな事より、早く爆裂魔法を覚える為にギルドへ行きましょう！」

はあ、見た目は凄く可愛いのになあ。

ギルドに着く。ロリと一緒に入ると物凄くザワザワする。爆裂魔法がどうとか、またやらかしたとかとか。

登録するためにカウンターへ向かうと並んでいた人や近くに居たか人が離れていく。男も女も関係なしに。

どんだけ嫌われてんだよコイツ。

とりあえず、避けられてるのは置いといて、カウンターで手続きを行ふ。

「それでは登録料としてまずは1000エリス頂きます。」

1エリスもないぞ！

（なあ、1エリスでもいいから貸してくれないか？1000倍にして返すからさ）

（は、はあ？1エリスだけ？しかも1000倍って何ですかその詐欺みたいなヤツ。1000エリスぐらい普通に貸しますよ。同士ですしき）

こちらを向いてニコリと笑う。…やべえ、ちょっとドキツとしたぞ。

「あー、この人の登録料は私が払いますので。」

そう言つてサラリと1000エリスを払う口り、その行動に好感度の上がる音がする。上るのは勿論自分の好感度。

「はい、1000エリス確かに頂きました。それではここに触れてください。ステータスを見ますので」

言われた通りに指定された場所を触る。

「おお！ステータスが幸運と体力以外、高い数値ですよ！これなりきなり上級職にだつて付けますよ！」

おお、流石異世界チート。これでステータスがダメだつたら…、泣くぜ？

「お、そなんですか。ちなみにどんな職業に？」

「そうですね、今つける職業だと…、上級職で…アーケュイザードに、ソードマスター、アーケプリースト、…最後に暗殺者ですかね」この職員のアーケュイザードと言う台詞を聞いた途端、ギルド内がザワつく。

具体的な内容は「また、頭のおかしい奴が増えるのか！」と言つた内容が殆ど。

「やりましたよ！アーケュイザードじゃないですか！やはり私の目に狂いはありませんでしたね！さあ！これから私と一緒に爆裂魔法を極めようではありませんか！」

ばさり、マントを翻し眼帯に手を当てる口り。その姿はまるで厨二病のよう。まさかこの病が異世界にまで蔓延しているとは…。年齢的にはおかしくは無いのかも知れないだろうが。

うん、でもね？厨二病口りも可愛いくて素敵。

「んー、暗殺者ってどんな職業なんですか？」

「えっと、暗殺者ですか。隠密に毒薬の精製、拷問など、徹底的に対人に特化した職業ですね。あまり人気はありませんが」

んー、ソウル的には暗殺者とか引かれるんだよなあ、多分この子はアーケュイザードだろうし。

「あの、まさか…アーケュイザードを選ばないとか言いませんよね？」

目が笑つてない。

(あのなあ、俺は特別なスキルを持つて他職業のスキルを覚えられるんだよ!)

(はあ…、またなんか怪しい事を言つてますね。そもそもそんな事転生者でも無い限り…。あれ?まさかその変な女の子の絵の書かれた服…)

(ああ、そうだよ。俺は転生者だ)

「え、ええええええええ！」

静かにしてくれ。

要約するどめぐみんとパーティーを組み、宿が馬小屋
という事にカルチャーショックをうける話。

「はあ…はあ…」

目を紅く光らせ顔を赤くし肩で息をする、口り。

別にやらしいことをした訳ではないし、現在進行形でしている訳で
もない。ただ、俺が転生者という事に何か琴線が触れたのだろうか、
物凄く興奮しているのだ。

「あー、なんだ。落ち着いたか?」

「ええ、落ち着きましたが、貴方の事が紅魔族的に物凄く気になるの
で後で教えてください!!」

「ああ、分かつた、分かつたから!」

口りよ、顔を赤くしてハアハア息をするな。まだ何もしてないのに
捕まりたくないぞ。

…それに皆が見てている。そういう顔はベットの中で（ry

「あの…、もう大丈夫でしょうか？」

「ああ、はい大丈夫です。すいません…」

苦笑いをしている受付嬢。

「あはは…、お二人は仲が良いんですね」

仲か…、まあ異世界に来て半日も立つてないが確かにそうかも知れ
ない。

「まあ、そうなりますね」

「ええ！初めてできた同士ですから！」

「うふふ、良かつですねめぐみんさん
ん？めぐみん？めぐみん？」

「なあ、聞きたことがあるんだが」

すると、めぐみん（仮）は何かを察したのだろうか。いきなり凄む。

「ええ、本名ですがなにか？私の名前に何か文句があるんなら聞き
ますよ」

「い、いや、めぐみんって名前俺は可愛いと思うぞ」

確かに、元の世界の基準で考えるとめぐみんって名前は物凄く個性的だが、ここは異世界。元の世界の常識はあまり通用しないだろう。だからそういう物だというふうに考えると、めぐみんという名前だけて可愛いものだ。

よし、めぐみんに萌えポイント1追加！

「そ、そうですか。名前を外の人に褒められるのは初めてで照れますね…」

そう言つて帽子の唾を使い、照れて顔を赤くしたのだろうか、顔を隠すめぐみん。

さらに1ポイント！

「めぐみんさんは紅魔族と言う種族で、名前や文化がとても特徴的で、里に住んでいる殆どの人達がアークワイザードの素質を持つている凄い種族なんですよ」

何そのチート種族。

「なら、めぐみんも結構強いんだろうな」

若干ネタに走りすぎる感があるけど、あの爆裂魔法は素人目に見ても強い魔法。それが使えるめぐみんと出逢えたのはかなりの幸運なんだろう。

「え、ええ。勿論ですよ。紅魔族随一の魔法使いですから」

自信満々なセリフとは裏腹に目を逸らすめぐみん。

「……」

まあ、いい。まずはギルドの登録が終わってないからな。

「では、これで全ての作業が終了しました。お一人で頑張つてくださいね」

「ん!? もう終わつたんですか?」

「はい、お二人がお話している間に終わらせておきましたよ」

「そ、そうですか。ありがとうございます」

「大丈夫ですよ。よくある事ですし。私としてはめぐみんさんに仲のいい人が出来て安心しましたよ」

やはり貴様もボツチか。ゆんゆんとやらをバカに出来ないぞ。

「ついでにパーテイー登録などいかがですか?」

「パーティーか、めぐみんはどうする?」

俺としては何も分からないのでパーティーを組んでくれると有難いんだが。

めぐみんをチラリと見る。めぐみんはチラチラと見てくる。
「……」

ああ、この無言。空氣で色々察したよ。コイツ絶対なんか地雷抱えてるな。パーティーって単語出た途端ギルド内が一気に静まつて皆がこつちをチラチラ見てくるもん。

「ハア…、なあめぐみん」

「は、はい!何ですか!」

そんなにビクビクするなよ。

「めぐみん。良かつたらパーティーを組んでもらえないか?」

「ほ、本当ですか!嘘だつたらこの街に爆裂魔法を打ち込みますからね!!」

オイ、やめろやテロリスト予備軍。そして、異常にザワつくギルド内。

「嘘じやないぞ」

「ふつふつふつ…、やりましたよ! ゆんゆん! どうせ貴方はまだボツチでしようが私はパーティーを組めましたよ!」

そのままハツハツハ…と高笑いをするめぐみん。コイツが避けられてる一端がわかつた気がする。

「あー、めぐみん。嬉しいのは分かるんだがそう言うのは後でもいいか? それでもう行つても大丈夫でしょうか?」

カルチャーショック。

意味を簡単に説明すると、異文化との交流などにより発生した常識

のズレが作り出す心理的ショック。

俺は今それを馬小屋の前で感じている。

「なあ、めぐみん。紅魔族は馬小屋で過ごす風習でもあるのか？」
「ハア？ バカにしてるんですか？」

「まあ、ないよな…」

馬小屋で過ごすのが風習のアークウェイザード…。

「じゃあさ、なんで泊まるところを紹介してと言つて連れてこられたのが馬小屋なんだよ！」

「あのですね…、どんなのを想像していたかは分かりませんが、この街の冒険者は収入がそんなに多くありませんし、大体は馬小屋止まりですよ」

「は？ めぐみんさ、お前アークウェイザードだろ。もつと金があるんじやないか？」

流石に馬小屋は無いだろう。二十一世紀のコンクリートジャングル生まれの文明人としてこれは許し難い。
つか、汚い。

「いえ、私爆裂魔法しか撃てませんので」
真顔でキッパリと言い張るめぐみん。

「何発撃てるんだ？」

「…1発ですかね…」

ああ、確かにこれは厳しいな…。

要約すると要約すら読む価値のないクツソ長い前置きと複製チートによる金策の馬小屋脱出大作戦その1。

「なあ、めぐみんよ」

「ん？ 何ですか？」

「金策だ」

「は？ 金策？」

金策の手段については既に思い付いている。そもそも複製スキルとアイテムボックスは金策の為に貰ったスキルなのだから。「めぐみんは俺が転生者だつて事は話したよな」

「はい！ まさかそれについて…」

「ああ、それについてちよつとな。俺のいた所は魔法が無くてな。空想の存在だつたんだ」

「ええ、それは聞きましたよ。信じられませんが」

「まあ、そうだろうな。よし、少し話をしようか、めぐみんよ。この例えばこの世界に火をつける魔法つてあるか？」

「ええ、ありますよ。初級の魔法ですが。ティンダ点火ですね」

「お、あるのか。でもさ、そのティンダーを使わなくとも火を付けることつてできるだろ？」

例えば、自然現象の雷による副次的な発火。摩擦による発火。同じ1つの現象をとってもそれを成す現象はひとつでは無い。それが魔法か科学かの違い。

魔法と科学。過程が違うだけで火をつけるという結果は同じ。人類にとつては文明を発達させるツールでしか無いのだ。

「確かにそうですね…。とう言つことは貴方の居た世界はその魔法ではなく科学と言うのが発展したんですね。でそれが何の関係が？」

「さて、次は科学と魔法の違いだが。なんだと思う？」

「魔法と科学の違いですか…。そうですね、魔力とかでしようか」

「ああ、そうだな。科学は適切な知識と結果を起こす為の材料が用

意出来れば人を選ばずにできるだろ？だがな、恐らく魔法は違う。そもそも魔法はスキルを覚えることによって使用ができる。だから、スキルを覚えられなければそもそも使えないんだ。覚えたとしても内包する魔力によつて使えるか使えないかが決まる。そつだろ？」

「ええ、確かにその通りですね。アークワイザードやアークプリーストはその職業と言つただけでそれなりの待遇を受けられますし」

ただし、めぐみんを除く。

「さて、めぐみんよ、こで問題だ。そのまほうとは違ひ誰でも扱える科学がメインの世界はどうなつたとおもう？」

「科学がメインですか…。うーん…」

悩むめぐみん。よし少し助け舟を出そう。

「じゃあ、めぐみん。科学を魔法に置き換えて考えてみな。誰でも職業に関係なく魔法が使える世界を」

「誰でも、魔法が使える世界ですか…。そうですね。多分今よりは文明が発展してると想ひます」

「ああ、そうだな。それで馬小屋の話に繋がるんだが…」

「は？この話がどう馬小屋の話に？」

「もうめぐみんも分かつてると想ひうがな、そんな科学によつて作られた俺の居た国はここよりも生活が天と地ほどの違いが出るほど発展していくな…」

「はあ…、でつまり？」

何故かこちらをジト目で見つめてくるめぐみん。

「こんな馬小屋で寝泊まり出来る訳が無いだろツ！」

…辺りを静けさが包む。今日の前に居るめぐみんの息遣い間でもが聞こえそうな程。

「えつと…、さつきの話はこの馬小屋のために？」

「ああ、勿論だとも。めぐみんよ！ふかふかのベットを手に入れる為！いざ！Let's 金策！」

それを聞いてため息をつくめぐみん。

「はあ…、さつきの話を聞いて頭が良いんだなと感心したんですが

…。いえ、頭は良いんでしょうが…。で、そもそも金策とはどうやるんですか？」

「複製スキルを使う。」

「複製スキルですか。聞いた事がありませんよ？」

「ここに転生した時に女神から特典として2つスキルを貰つてな」

「で、その2つのスキルをの1つが複製スキルですか」

「ああ、複製スキルはな、指定した物品と全く同じ物を作り出すのと、同意を得た相手から任意のスキルを1つコピーする事が出来るんだ。スキルポイントを消費せずにな」

「な！ そうですか！ そのスキルを使えば爆裂魔法を覚えられる訳ですね！」

「ああ、そうだぞ。だが、今回のメインは金策だからな？ スキルを覚えるのは宿が取れてからだな」

「そう言つて興奮するめぐみんを抑える。

「でだ、めぐみんよ。何か売れそうなものは持つてないか？」

「売れそうなもの物ですか…。複製して売るんですよね？」

「ああ、そうだぞ。だからその物が無くなつたりはしないから安心してくれ」

「となると…」

めぐみんが懐からゴソゴソと石の様な物を取り出す。

「これの石はなんだ？」

「マナタイトですよ。魔力の塊の様なもので間力を回復したり出来るんですよ。魔法使いは必須のアイテムですね」

「へー、マナタイトか。で、それおいくら？」

「そうですね、結構純度もありますし200万エリスでしょうか」

「は？ 200万？ めぐみんそれ盗んだんじゃないよな…」

「し、失礼な！ 買わせたんですよ！ ゆんゆんに！」

また出た、ゆんゆん…。よく分からぬがゆんゆんは泣いていいと思う。

「あ、じゃあそのゆんゆんとやらに感謝して売りまくるぞ」

数分後…

「なあ、めぐみんよ！どうして誰も買わないんだよ！」

要約するとめぐみんにセクハラをして金的をされ全く進まない申し訳程度の馬小屋脱出大作戦その2とシリアルス回。

「なあ、めぐみんさ、ここつて魔法使い居ないのか？」

「え？ そんな事はないと思ひますけど…」

「ア？ ジやなんで卖れないんだよ！ 元手は0だけどさあ…」

「とりあえず、このマナタイト誰も買わないし閉まつてもいいか？」

「良いんですけど…。結構量がありますよ？ どこに仕舞うんですか？」

？

「ん、アイテムボックス」

「アイテムボックス？」

「ああ、めぐみんには話してなかつたか。」

「2つ貰つたチートの残り1つだよ。生き物以外無限に入る袋とも思つてくれ。」

「おお！ 結構使えそうですね…。流石転生者…」

変な所で感心してるめぐみん。俺としては爆裂魔法のみで生き延びてきためぐみんの方が凄いと思うけどなあ。

さて、本当にどうしようか。馬小屋で寝るのは避けたいし…。いつその事クエストを受ける？ いや、この世界についてまだ全然分かつてないし、戦力になるのはめぐみん1人だしなあ…。
あ、そ う だ。

「よし！めぐみんよ！クエストを受けに行くぞ！」

「ハア？もう爆裂魔法を撃つて疲れたのでイヤですよ」

…えー。嘘でしょ。この口リつ子やる気無さすぎじやないか？

「なあ、めぐみん。今さマナタイトつてのが沢山有るんだよ。売れ

残りの。」

「はあ…、確かにありますけどあれ売るんですね？」

「いや、アレをクエストに使おうかと思う。めぐみんの火力で全て吹き飛ばす!!」

その言葉にめぐみんの表情が固まる。

「貴方は神か！」

いきなり神格化した俺。訳が分からん。

「やはり私の目に狂いはありませんね！爆裂魔法の良さを理解してくれる上に、1日1発しか撃てない爆裂魔法を何発も撃たせてくれるなんて…」

そのまま「ぐへへ…」と笑いながら内股でモジモジしてトリップするめぐみん。

うん、そうだね君は頭に狂いがあるね。

爆裂魔法の良さは分かるが。流石にそこまで入れ込むことは出来ないぞ。

とりあえずトリップしためぐみんを戻さなくては話が進まないので、意識をこちらに戻そうとほっぺをムニムニしたり引っ張る。

「何をするんでふか！」

やべえ。これは気持ちいいぞ。なんなんだこの柔らかさは！ああ、

お手手がふやけちゃううう…。（路上です）

「ああ、めぐみんのほっぺやわわあッ」

突如、股間に衝撃が走り、俺の意識は闇へと沈んだ。

「うううう…なんだ。夢、か」

目が覚めたのは見覚えのある場所。最初めぐみんに出会った時に案内された馬小屋だった。

「確か、俺はあるの時…」

めぐみんと付き合い出して初めてのデート。お互いに惹かれ始めて付き合う迄に様々な困難があつた。2人でこういうふうにデートが出来るなんてあの頃は思つてもいなかつた。

それ程までにあの戦いは激しい戦いだつたんだ。

事の始まりつてのがあつたのかはよく分からない。何しろ事故で死んで転生してきた時には既に魔族と人族の戦争が始まっていたからだ。

…まあ、何が理由だろうと戦争が始まれば関係が無いからな。

異世界転生ラノベでよくある様な魔族が優勢で人族が滅ぼされる寸前つて事も無かつた。お互いの勢力は拮抗していたんだ。

だけど、拮抗しているから良いつてもんじやない。勝利目前なら笑つていられただろう。敗北寸前なら諦められたかも知れない。拮抗している戦力バランス、それが不利にならないように兵士や冒険者達は死力を尽くして戦つた。拮抗していると言う状況が諦める事をお互いに許さなかつたんだ。

影響が出た兵士や冒険者だけでは無かつた。市民達にもあつたんだ。戦争に駆り出されて居なくなつた兵士や冒険者には役目があつ

た。

兵士は治安維持、冒險者は魔物退治だ。

街から殆どの冒險者が消えた。でも、冒險者が消えても魔物は現れる。独自の戦力を持たない街や村は混乱に陥った。

俺が転生して初めてやつてきた辺境の街アクセル、そこもそんなに街の1つだった。

普通の人なら絶望したかも知れない。日本人なら尚更。でも、俺は運が良かつた。いや、個人的には運命の出会いいつてより、必然の出会いの方が良いんだけど。

まあ、とりあえず、めぐみんと出会つたって事だ。

初めに出会つた時は変な奴だと思った。現代日本で言う厨二病患者そのままだつたからだ。

でも、俺はそんなんめぐみんと触れ合つていくうちに惹かれて行つたんだ。

隠密得意とする俺と爆裂魔法しか使えないめぐみんは結構相性がよかつた。俺が隠密を使い、めぐみんが爆裂魔法を放つ、最高のステルス性能に最高の火力。俺達は最高のコンビだつた。

順調にギルドでの立場をあげた俺達に等々戦争への参加が義務付けられた。確かに戦争めぐみんの放つあの魔法は戦略手に価値を持つだろう。戦争にだつて勝てるかも知れない。

けど、そこにめぐみんの意思は存在しない。戦争に行けば兵器として人を殺す、その事にめぐみんの小さな身体は耐えられない。

俺はめぐみんに戦争に言つて欲しくない。

だから聞いたんだ、「戦争に行きたいか?」つて。

そしたら、めぐみんはこう答えたんだ。「行きたいわけがないと、でも行かなければ貴方に迷惑がかかるから。理解者も居なく爆裂魔法を1発しか撃てない1人私と一緒に居てくれた貴方を…」と泣きながら微笑んで。

めぐみんは覚悟を決めたんだろう。

だから俺も覚悟を決める事にした。

次の日、俺とめぐみんはギルドを抜けた。

要約すると茶番で大嘘。そして馬小屋脱出大作戦その3じやなくて恋愛回。

ギルドを抜けてからの生活はそんなに苦しいものでは無かつた。冒險者の居ない街では戦力が不足しているからだ。俺達は2人で旅をし様々な街や村を回つた。意外に思われるかもれないが結構歓迎された。その理由は簡単、魔物による困り事を解消していたからだ。そんな旅を続けると、幾つか変化があつた。

1つ目は戦争が終わつた事。これは噂として流れてきた話だが。アレだけ混乱を招いた戦争の終わりとしては呆気なく。解決したのは勇者などではなく。これ以上の長期化を懸念した指導者による和平交渉だったと言う。これはかなり信ぴよう性の高い話だと思う。何故ならギルドに少しづつ冒險者が戻つてきていたからだつた。

2つ目は俺とめぐみんが付き合い始めたという事だ。ハツキリとしたきつかけと言う物があつたらロマンチックだつたんだろうが、そんな物は無かつた。強いて言えば出会つた時つて奴だろうか。まあ、2人で旅をして同じ飯を食べ、同じ寝床で寝る。お互に思春期である程度的好意を持つてゐる。こうなるのはきっと必然だつたんだろう。

「すいません、金玉蹴つ飛ばした私も悪いですが、その気持ち悪い話何時まで続きます？」

そう、今までのは全部空想の產物。女神アクアにも言われたのと同じ奴。俺の悪い癖だ。

あれ？でも喋つて無くない？アクラアは頭の中読んでたけど…。

「全部話してましたよ」

「え、マジ？」

「はい」

あ、オワタ。ハイ！人生オワタ！

「蹴つたあと、泡を吹いて倒れた貴方を見て沸いた罪悪感が全て吹き飛びましたよ」

「あ、はい…」

やべえ、めぐみんの目怖い。あの紅い目がこんなに恐怖を与える物だなんて！

「えつと、本当にごめん…」

見ろ！コレがJapanese sedogezza!!日本人の本氣だツ !!

「あ、いえ。そこまでしなくて大丈夫です。私も悪い事しましたしど…」

まあ、金的される事実を作つたのは俺なんだけどね。

マゾでもないし、ご褒美でもない。

「あ、じゃあ…その無かつたことにしないか？」

きつとこの選択肢が2人を幸せにするはず。妄想のように。

「ええ、そうですね。私しても恥ずかしいですし、それより…、えつと…」

突然モジモジするめぐみん。おトイレかな？可愛い。

だが、俺は（ゲス顔）ジエントルマン。きつと言い難い事なんだろう。無理には聞かない。（ゲス顔）

これにより、無理して言うパターンと、そのまま言わないで好感度が上がる2パターンがある。

これをその場でサツと思いつく俺。流石天才。

「あ、えつと言い難い事なんだろう事なら聞かないでおこうか？」

「い、いえ、そ、その…。おちん…、その！股間は大丈夫でしょうか！」

やべえ、すげえ興奮する。あえて全部言い切らないのがよし！恥ず

かしがりながら、顔を赤くし俯きながら股間を大きな声で言うめぐみん。

控え目に言つてすげえ可愛い。

控え目に言つてこの場で襲いたいレベルに。

でも、俺はジェントルマン。そんな事はしない。

愛と同意無しではね☆

ほら、俺つて意外とロマンチストなんだぜ？

と、まあ、こんな事は棄てといて、めぐみんに答えてあげなければ。
「ああ、大丈夫だよ。流石に蹴られた時は死ぬかと思つたけど」
オイ、笑つてる奴がいるかもしけんが笑い事ではない。

「そ、そうしでしたか…」

そのまま黙つてしまふめぐみん。

きっと恥ずかしいのだろう。無理もない。同性の同士でのバカ話
と異性と二人つきりで話すのはまったく意味が違う。

よし、じゃあ口説こうか。（唐突）

「なあ、めぐみん。怒つてるか？」

「い、いえ怒つてませんが」

「そつか、それとも嫌われたかな」

ハハハ…まあ、しようがないかと苦笑いをする俺。

「いえ、その嫌つている訳ではありませんが…」

うん、顔観れば分かるよ、何となくこの空気分かつてるんでしょ。
照れてるんでしょう？

「お、そう言つてくれると嬉しいよ、めぐみんは結果は嬉しいんだ
な」

「わたしが優しいですか？そんな事は無いと思いますが…」

「いや、そんな事は無いと思うぞ。あんな事しちやつたら普通の女
の子なら怒つてどつか行くと思うし。めぐみんはちゃんと連れてき
てくれる？普通なら自分の住んでるところにこんな奴連れてこな

いよ」

ちゃんと「好きでも無ければな…」と付け加えておく。

そして、めぐみんをチラリと見る。黙つたまま顔を赤くし逸らす。

「ハア…、そんなに照れるなよ。こっちまで恥ずかしくなるだろ。

冗談だよ」

「な、なら言わなければいいじゃないですか！冗談だなんてドキドキして損しましたよ！」

そのまま向こうを向くめぐみん。

そして、掛かつた！と思う俺。

心理戦において空気と言うのはかなり重要だ。そして、今その空気は最高の状態に高まっている。

「なあ、めぐみんさ。いいか？」

声色を低くし真剣なイメージでめぐみんに語りかける。

「多分さ、俺とめぐみんが今お互いに思つている事つて同じだと思

う」

「……」

何も言わないめぐみん。

「……」で気持ちを伝えるのも良いと思うけど。出会つたばかりだし、まだ言わないでおく

「……分かりました……」

そう答えるめぐみん。殆ど答えてるような物だが…。

「だからさ、もう少し落ち着いたらしつかり話さないか？」

コクン、と頷くめぐみん。

「…貴方の名前はなんて言うんですか？」

ああ、確かに名前も教えず告白か。

「水神 紅夜」コウヤって呼んでくれると嬉しい

すると、めぐみんはこっちを振り向き。

「…これからよろしくお願ひします。コウヤさん」少し赤みの残つた可愛らしい笑顔でそう言った。

要約するどちらとした馬小屋脱出大作戦

さて、前話（メタ）の出来事で出会つて直ぐにめぐみんと仲を深める事の出来た俺だが、世の中いい事ばかりではない。

そう、グダグダしてまだ馬小屋脱出出来ていないのでから。

「なあ、めぐみんさ、もう奥の手使わないか？」

「奥の手ですか？」

なんの事なのかというふうに首を傾げるめぐみん。

「…馬小屋の事忘れないよな」

目を逸らすめぐみん。可愛い。可愛い。可愛いけど！

馬小屋では寝たくない。

絶対ダニとかノミ居るじゃん！めぐみんの白雪のような素敵な肌が傷ついてしまう！

ダニめ…、めぐみんの肌を直接ちゅーちゅーするなんて…羨ま（ry、許せん！

このままだと娘や妻を攫われた元工作員のように、怒りのままに馬小屋を燃やしてしまおかも知れない。ダニとノミ相手なら俺だつてハリウッド張りの活躍が出来るはず。

俺だつて男だ、好きな女の為ならどんな敵（ノミやダニ）だつて…。「あの、好きだと言つてくれるのは嬉しいんですけど…スケールの小ささにどうツツコミを入れれば…」

あ、やらかした☆

一度ならず2度も！

まあ、めぐみんの表情を見る限り大丈夫なのは分かるけど。

「そもそも、この藁そんなんに汚くは無いんですよ？馬小屋と言つてもちゃんと人が泊まることを考え、煙で燻しますし」「藁を燻すのか？」

なんだろう。新手の燻製かなにかかな？イチゴのショートケーキの燻製とからな知つてるけど。

「あ、知らないんですか。煙で燻すとコウヤさんの言つていたダニやノミを退治出来るんですよ。だから馬小屋ファイヤーはしなくていいんですよ」

なんと！怒りの馬小屋ファイヤーしなくて良いのか！流石めぐみん賢くて可愛いなあ。

んー、でもなあと、渋る俺を見てかめぐみんが魅惑的な条件を提示してくれる。

「そんなに広くありませんし、い、一緒に寝ても良いですよ。エツチなのはまだダメですけど…」

「まだ、か…」

「ツ!!どこに反応してんですか！」

顔を赤くするめぐみん。恥ずかしがるめぐみん可愛い。

まあ、アレについては置いといて。めぐみんが一緒に寝てくれると言うのは物凄い嬉しい。具体的に言えば、ガチヤでなけなしの石狙い通りの単発最高レアが当たった気分。

ああ、明日きっと黒塗りの高級車に…いや、辞めておこう。ここは異世界。黒塗りの高級車なんて無いんだ。

「んー、めぐみんと一緒に寝るのは嬉しいだが、出来ればさフカフカとまでは行かなくてもベッドで寝たくないか？」

「私も藁よりはベッドの方が良いんですけど…、そもそもどうやって泊まるんですか？」

「奥の手を使う」

「奥の手？ああ、言つてましたね。で、どんな方法なんですか？」

「よし、興味を持つてくれたか！その前にめぐみん。袋とお金はあるか？」

「はあ、ありますけど。このお金じや泊まれても一部屋で1泊ですよ」

「大丈夫、1エリスあれば十分だからな、簡単な話だよ、マナタイトみたいにこのエリス硬貨を袋に入れて複製するんだ。そうすればあ

ら不思議、なんと2倍に」

ドヤ顔をする俺と黙るめぐみん。

「…えっと、それ犯罪ですよね」

「めぐみん。俺のスキルはまったく同じ物を作れるんだ。偽造では無いぞ。違う人が作った本物だ。そもそもバレなければ犯罪ではないぞ」

「ツて！それ！犯罪って認めてると同じじゃ無いですか！」

「…、めぐみん。お布団暖かいぞ」

「わ、私は嫌ですよ！こここの領主にバレたら大変なんですから！」

「そんなにヤバいのか領主？」

「ええ！クソですよクソ！」

「…ああ、分かつたからそんなに興奮するな！」

「そもそもお金は普通に貯めるんじゃダメなんですか？」

「いや、それだと何時になるか分からないぞ」

「確かにそうんですけど…。バレたりした時の事を考えると私は絶対に嫌ですよ！」

う、めぐみんがそんなに反対するとは…。辞めておこうか。

「じゃあ、2人で暫くは馬小屋暮らししか…」

「そんなに馬小屋暮らし嫌なんですか。私は家が貧乏だったのでもそんなどには気になりませんが」

「めぐみんは貧乏だったのか？」

「ええ、でもそんなに辛い暮らしではありませんでしたよ、何かあれば妹のこめつこと一緒にゆんゆんに奢つてもらえばいいですしなんだ？ゆんゆんってめぐみんのお財布かなんかなのかな？災難だな。

「大変な思いをしてたんだな…」

「ん、同情なら要りませんよ？コレからはコウヤさんも居ますし貧乏生活なら直ぐに脱出出来るはずです」

「お、めぐみんには何か案があるのか？」

「いや、案と言うより普通にクエスト受けて魔物を退治するだけですよ？魔力に関してはマナタイトが無限に作れるので大丈夫ですし」

「あ、ホントだ」

なんで、こんな事に気づかなかつたんだろうか。

「そつか、なら結構めぐみんに頼りきりになつちやうかもな」
正直、男としてはめぐみんにかつこいい所を見せたい。ダニも居ないしね。

はあ、明日クエストを受ける事になつたがめぐみんに養殖と言うM
MOなどで言うパワーレベリングをしてもらう事になつたが、うん、
男として情けない事この上ない。

要約すると衣装選びにめぐみんレビュー

「さあ！私がコウヤさんに相応しい装備を選んで上げましょー！」

今、俺達が居るのは武具屋の前。これから冒険するのにお気に入りのアニメキャラが描かれたTシャツと、ジャージと言う装備では問題ありなので、めぐみんが相応しい装備を見繕ってくれると言うのだ。

まあ、冒険つて言つてもエクスプロージョンで倒しきれなかつたやつに、トドメをさすのが目的なんだけどね。

「ふふふ、これなんてどうでしようか！」

めぐみんがオススメをして来たのは黒いフード付きのコート、日本で着てたら速攻で不審者のレッテルを貼られそうな奴。

確かにね？カツコイインだけどさ、日本人の感覚としては結構恥ずかしくてさ…。ほら、武具屋のオツサンも苦笑いしてるし。

「一応聞くけどさ、ネタとかじやなくてさ、本当にそれが良いと思つたんだよな」

「ええ、勿論ですよ！紅魔族として磨かれた私のセンスを疑うのですか？」

顔を詰め寄つてくるめぐみん。柔らかそうなお口が…。おつと、今は自重、自重。p r p rは我慢我慢。

まあ、中2的ではあるがカツコイイのは事実だし…、そもそもめぐみんに買つて貰つてる立場だしな…。あまり文句を言うのも良くなさいか。

それに、アニメTシャツきて外歩いてる俺も俺だし。

「よし、上着はそれで良いとして、ズボンとシャツはこのままつて訳じやないよな？」

「その、女の子の絵が描いてあるシャツは兎も角…、ズボンは誰が見てもダサいと思いますよ」

確かに!!そもそも今の格好に黒コート着たら、チグハグだよなあ格好が。

「なら、見繕つて貰えるか？」

「はい!!」

楽しそうに服を見繕うめぐみん。見ているとなんか恋人になつてデートをしている気分だ。

「いいね、デート。まだ付き合つてる訳じゃないけど、いつか2人で街中をブラブラしてみたいもんだ。よし!!その為にも頑張らなきやな。口りつ子に奢つてもらう為に転生した訳じゃないし。

まあ、口りつ子のヒモも魅力的ではあるんだがな。

「なあ、めぐみん。買つてもらうのは嬉しいんだが。お金は大丈夫か?」

「あ、大丈夫ですよ。マナタイトと物々交換しましたし」

「あ、そうなの?え、じゃあ…」

「奢つて いる訳ではありませんね」

…なんだろう。この気持ち。人の心つて複雑ね。

「エクスプロージョン!!」

地面が爆ぜる。

空気が爆ぜる。

敵が爆ぜる。

「これが爆裂魔法…」

予想以上だつた。これだけの火力。めぐみんが惚れ込むのも分かる。俺だつて撃てばきっと惚れ込むだろう。それだけの魅力がこの魔法にはある。

でも、俺が今やつてている事はめぐみんを背負いながら、ジャイアン
トトードとか言うクソデカガエルの打ち漏らしに短剣でトドメを刺
す事。

冒険とは真逆と言える行為。

でも、俺は別に嫌思つてゐる訳ではない。
だつて：

めぐみんのお胸がすつごいから♥

本当にすつごい♥

めぐみんの軽めの体重によつて俺の背中に押し当てられる、大きく
はないが確かに柔らかさを持つた胸。

小さいからこそ感じられる物があるんだ。

アクア様!!感謝致します!!今だけは。

それにめぐみんの体温。凄く暖かくて心地いい。一緒に寝たから
既に分かつてはいたんだが、あの時とは違う温もりを感じられる事が
出来る。

トクン、トクン、と背中に伝わつてくるめぐみんの心臓のリズムは
まるで時計のよう、この時計によつて俺は今めぐみんと同じ時を感じ
てると実感出来る。

「今!俺は異世界を生きているんだッ!!」

「わっ、ビックリしましたよ…。いきなり叫ばないでください」

「あ、すまんすまん」

今回は聞こえていなかつたみたいだな。

「なあ、どうだ?1日に何回も爆裂魔法を撃つ気分は」

「最高ですよ！」

「そうか、マナタイトはまだあるか？」

「はい、足りなくなつたら言いますし」

「了解、俺も早くめぐみんに爆裂魔法教えて貰わなきやな」

「あれ、まだ教えていませんでしたっけ？」

「ああ、昨日はそのまま寝ちゃつたしな、まあそのうち頼むよ。ある

程度レベル上げなきや」

「ですね!! 私も爆裂仲間が出来るのは楽しみですし」

「はあ…」

「どうしたんですか?」

「疲れた、少し休まない? ほら、そこの木陰とかで」

女の子1人背負つて走り回りながら、カエル殺してんだぜ? いくらめぐみんからヒーリングを受けてても重労働過ぎるわ。

木陰になつてている所にめぐみんを下ろし、隣に俺も座る。

外に出てお互に少し汗をかいただのだろう、めぐみんからいい匂いがする。勿論、めぐみんにはそんな事は言わないが。

「マナタイト、複製お願ひできますか?」

「お、いいぞ」

めぐみんから渡された、めぐみんの体温の残るマナタイトを複製する。

ほら、とめぐみんにマナタイトを渡す。

「本当に便利な能力ですよね」

「めぐみんも1回死んで見れば貰えるかもな」

「い、嫌ですよ! 爆裂魔法を極めるまでは絶対に死にませんから!」

「分かつてるよ。それに、めぐみんに死なれたら俺が困るからな」

「うふふ、分かってますよ」

要約すると筋トレとめぐみんヌルヌル丸呑みプレイ

「あの、私、そちら辺で爆裂魔法撃つていいですか？」

ああ、めぐみんには暇だつたか。結構アクティブな感じがするしな。俺は結構日向ぼっこが好きなんだけどね。

「それにしてもな…」

爆裂魔法の音が凄い。騒音レベルとしては基地の隣よりうるさい。結構距離は離れてるのにここまで爆音が響いて来るし衝撃や風だって凄い。まあ、こんな状況じや日向ぼっこは出来ないし。俺も少し運動するかな。

「めぐみん！少し走つてくるな!!」

離れた所で爆裂魔法を撃つているめぐみんに声を掛ける。聞こえてると良いんだがな。

「分かりましたー!!」

マナタイト鉱石の山の隣で爆裂魔法を撃ちながら答えるめぐみん。ちゃんと聞こえてた見たいで良かつた。

うーん、爆裂魔法を撃つのは良いんだが…。隣にあるマナタイトの山。まさか、あれを全部使う気か？数千万円が吹っ飛ぶぞ。まあ、タダなんだけどさ？日本に住んでた頃は金持ちって訳では無かつたし、ああやつて数千万円が吹き飛ぶのを見ると、何か恐ろしさが込み上げてくる…。

めぐみんつて凄いな。本当の意味で我が道を行つてる気がする。めぐみんのこう言つた性格は凄くカッコイイと思う。

「まずは走り込みでもするかな」

筋トレの手段には幾つかあるが、今回行うのは走り込み。他にも腕立てや腹筋などのメジャーな物もあるが、それは外で無くても出来る上、これからはめぐみんを背負いながら、という事も増える事を予想してだ。

「はあ…、はあ…、はあ…」

キツイ、酸素が足りない。今まで運動をしてこなかつたせいだろう、めぐみんを背負いながらの時は軽いランニング程度だつたし、背中に当たるお胸のお陰で何とかなつたが、それがない今は死ぬほどキツイ。

未来が分かつてれば戦闘系のチート選んでたのに…。

でも、このチートのお陰でめぐみんに会えたんだよなあ。さて、時間も経つたしめぐみんはどうしてるかな、とめぐみんの居る方を見ると…

口からめぐみんのお脚の生えたクソデカガエルがいた。

「めえええええぐみいいいいん!!」

なんで喰われてんだよ!!

腰にある短剣を確りと確認してから、めぐみんの元に全力で駆け寄る。

「めぐみん!! 大丈夫か!」

声に合わせてめぐみんが足をバタバタさせる。

良かつた。無事みたいだ。

まだ呑み込めてないと言う事は恐らく呑み込むにはある程度の時間が掛かるはず、恐らく歯も無いだろう。少なくともある程度の時間はめぐみんの安全は確保されてるはず。

腰から短剣を引き抜く。

呑み込んでいる最中だからだろうか、武器を持つて近くによつても反応しない。

「これなら…」

ジャイアントトードの巨体を支えている前足。それを短剣で思いつきり切りつける。

痛みを感じたのだろう。巨体が少し揺らぐ。

「よし…」

目的は前足の切断。それを目指して何度も切りつける。

「おつ！」

片足を切断した時だつた。もう片方の脚だけではあの巨体を支えきれなかつたのだろう。ジャイアントトードが地面に倒れ込む。

「めぐみん!!」

倒れ込んだ事により、カエルの口が低くなりめぐみんの足に手が届く様になる。

「今引っ張るからな！」

声に合わせてめぐみんの足を掴んで思いつきり引っ張る。

「うおッ！」

カエルは足を切られた事により呑み込むの力も少なくなつたのだろう。

思つたより抵抗が無く、めぐみんを引き抜く事が出来た。

ここまで良かつただろう。ヒロインがピンチで、主人公が助けた。よくあるけど、飽きられず、幸せになれる。そんな話だ。

でも、状況を考えて欲しい。

思つたよりの抵抗が無かつた為に発生した反動。

めぐみんが逆さまで足を引っ張つた事によりめくれあがつた服。

要約しよう。

ほとんど上裸のヌルヌルめぐみんが俺の体に覆いかぶさつて來たんだ。

勿論!!俺にとつては最高な出来事だ!!ヌルヌル上裸の口りつ子に抱き着かれるなんて妄想すらした事も無かつた想像の範疇を超えた幸せが俺に降り掛かつて来たのだ!!

上裸ヌルヌルロリつ子が上に乗り、ハアハアしてる…!!

これってまさかッ!!

事後!!

いや、ヤつてはいなんだよ? 雰囲気雰囲気。

「ふう…」

これ以上めぐみんを上に乗せてたらまずいのでゆっくりめぐみんを下ろす。

「おつと」

眼福、眼福。

何がとは言わんが、物凄く眼福。

「おい! おい!」

このまま見てるのもアレなのでめぐみんを揺すつて起こす。

「んあ、コウヤさん…?」

「お、めぐみん、目が覚めたか」

「ええ、助けて貰つたみ…」

喋つている途中でめぐみんが固まる。

多分、気付いたのだろう。今の状況に。

「なあ、めぐみん。言つておくが俺のせいではないぞ。俺はめぐみんに変なイタズラとかしてないからな?」

「ほ、本當ですか? 目がいやらしいんですけど」

急いで胸を隠しためぐみんがジト目でこちらを見てくる。

「本當だ、何もしてない。俺はめぐみんに嫌われたくは無いからな」

しつかりと相手の目を見ながら真剣な顔で答える。

「そ、そうですか…。疑つてすみません。服もこんなになりましたし帰りませんか?」

「あ、めぐみん。そこの川で汚れ落としてからにしたらどうだ? (次回予告)」

要約すると、川でめぐみんが全裸で水浴びと魔剣使い

「い、いいですか!? 絶対にこつち見ないでくださいよ!?

「あいよ、了解、了解（生返事）」

アクセルの街からすこし離れた所にある小川。そのすぐ側でめぐみんは今、全裸で立っている。

俺はたつて いる。

さて、外で全裸になつて いるめぐみんだが、露出に目覚めたとか、そういうプレイをして いる訳でも無い。

ただ、憎き仇敵ジャイアントトードによる丸呑み攻撃で、全身ヌルヌルとなつためぐみんとそのままの状態で街に入ると、あらぬ疑いを掛けられるため、ヌルヌルを落とす為に小川でヌルヌルを落としているだけなんだ。

まあ、ヌルヌルを落とす事に関しては俺だつて賛成、そのまま街に行けば憲兵さんが群がつて来るだろ うし、ジャイアントトードの体液が恐ろしく臭い。鼻が曲がるとかそ ういった刺激臭では無いんだが…、この上ない不快感を与えてくるのだ。

臭くなれば、ちよつとだけヌルヌルを楽しんでも良いんだけどね

☆
ヌルヌルロリつ子大好きだし!!

あ、 そ うだお洋服洗つてあげよ（唐突で純粹な善意）。

「めぐみん、洋服洗つておくぞ」

俺が そ うめぐみんに声をかけると、何故かめぐみんは驚きと焦りの混じつた感じで答えを返す。

「え、あ、ああ!! ちよ、ちよつと待つてください。自分で洗えるので大丈夫です！」

「そ うは言つても、身体のヌルヌルを落とすのに結構時間経つてる

し、そのまま服だけ洗つたら風邪引くぞ？」

「う、そ、そうかも知れませんが…（変な事とか…）」

恥ずかしがつてゐるのだろうか、後半の声がかなり小さくなつていてるめぐみん。

だが、確りと聞こえているぞ？

「めぐみん、変な事つてなんだ？」

アクア様…、貴方のおかげで夢が1つ叶いました。

幼女に「変な事つて何かな？」つて聞く夢が…。

「き、聴こえてたんですかッ！変な事は変な事ですよ！そんな事聞かないでください…」

顔を赤くしもよもによ言い出すめぐみん。

めぐみんかわいいよめぐみん。

「はあ…めぐみん、俺の事を信用してくれよ…。俺はめぐみんが風邪を引かないか心配で言つてるんだぜ？何を想像したのかは分からんが変な事はしないぞ」

したくとも今のめぐみんの服や下着はカエルの粘液だらけ。これじゃ、ジャイアントトードの服や下着にイタズラをしてると一緒になつてしまふ。

そんな事はしたくないし、絶対にしない。だから、俺は嘘はついてない。

風邪引くのが心配なのも本当だし。風邪から肺炎に悪化する事だつてあるんだ。油断はならない。

「本当に、変な事したりしないんですよね…」

ジト目で此方を見てくるめぐみん。

全裸ロリジト目頂きましたッ!!

「ああ、しないぞ（紳士の顔）」

「そ、そうですか…、じゃあ、信用するので洗濯お願いしますね」

「確りと脱水もしくからな」
めぐみんが川のほとりに置いてある服を持つてくる。

「じゃあ…、お願ひしま…」

服を渡す状態で固まつたままのめぐみん。

はて?どうしたんだろうか。

じつとそのまま、固まつためぐみんの顔を見るとどんどん顔が真っ赤になっていく。

「…？」

理解出来ないので思わず首をかしげてしまう俺。

すると…

「きやああああああッ!!」

いきなり大きな叫び声を上げためぐみんに持っていた服を顔に投げつけられた。

解せぬ。

服の当たった顔がカエル臭い。

「なあ、めぐみん。いきなり投げないで欲しいんだが…」

「なんで、私の裸を平然と見てるんですか!!」

「え、なんでって…」

そりや…ね?

「そこに裸があるから?」

「そ、そこに裸があるからって!何を言つてるんですか!!」

「は?いや、山があれば登ると同じ様に裸があれば見る!!それが男だろ」

「…まさか変態だつたとは…」

手を上手く使い大事な所を隠すしてジト目のめぐみんかわいいよ
ちなみに山にはあまり興味はない。興味はあるのはなだらかな丘
だ。

「そ、そのまま私の裸なんか見て楽しいんですか?認めたくはあり
ませんが…、ゆんゆんの方が身体は凄いですし…」
これはいけない。めぐみんは自分の魅力を分かつていない。

おしえてあげたい（物理）。

「めぐみん。めぐみんの身体は充分魅力的だぞ。勿論身体だけじゃない、その意外と恥ずかしがり屋な所とか。独特な雰囲気とか。性格とか。爆裂魔法を撃つてる所とか、みんなみんな魅力的で大好きだぞ」

「え、あ、そうですか…」

圧に押されたのだろうか、少し怯むめぐみん。

「まあ、裸見たのは事実だしなゴメンなめぐみん」

「ま、まあ、それはもう良いですけど…、は、早く洗つてきてください！」

落ちた服を拾つて押し付けるめぐみんに、俺はコートを脱いで渡そうとするが受け取る前にめぐみんは向こうへ行つてしまう。
はあ…、と思わずため息をついてしまう俺。服を持っていかなかつたのだがどうするのだろうか。

「じゃあ、俺はすぐそこで洗つてくるからな」

聞こえてはいないだろうがそう言つてめぐみんから少し離れた所に服を洗いに行く。

「そここのキミ!!どうして服を着てないんだ!!まさかそこの男に…」
めぐみんの居る所から男の大きな声が聞こえるのでどうしたんだろう、とめぐみんの方を見ると女を数人連れた、いかにも勇者といったやつがめぐみんに絡んでいた。

……

「よし、アイツ裸見たみたいだし」

これはもう…ね?

「殺すか（次回予告）」

要約すると「魔剣使い死す！」エクスプロージョンは
最強つて訳よ

「あー、そこのお方、俺の連れに何か？」
殺意を抑えて勇者（仮）達に話しかける。

もう、なんかね？ほら、お約束的に面倒な事になる予感しかしない
けど仕方ない。

「コ、コウヤ!!遅いですよ、なんか変なのに絡まれちゃつたじやない
ですか!!」

「う、すまんな」

「キミはこの子とどんな関係なんだい？」

「パーティードよ、パーティー。そつちはどんな用で？」

「クエストを終えた帰りにこの子が1人で身体を洗つてるのを見て
ね…」

「はあ…、もう大丈夫だし、帰つても大丈夫ですよ」
ありがとうございます。と、精一杯の殺意とお帰りくださいオーラ
を押し付けながら軽く頭を下げる。

「ほら、めぐみん、行くぞ」

めぐみんの手を掴んで、直ぐにその場を立ち去ろうとするが、勇者
(仮)に道を遮られる。

「待つてくれ!!」

「…なんでしょうか…？」

「そこのめぐみんちゃん?どうだろうか、僕と一緒にパーティーを
組まないかい？」

「はア!?」

殴りたいこの笑顔な、イケメンスマイルで凄いことを言い出す勇者
(仮)。

こいつには、パーティードを組んでいたという言葉は聞こえていな
かったのだろうか、それともあの短い間で忘れてしまったのだろう
か。

この言葉には勇者の連れの女の子も困惑。

「あの…、私既にコウヤさんとパーティを組んでいるんですが…」「でも、キミから感じるその魔力は恐らくアークワイザード。それに比べて、そこの男は魔力も乏しくまだレベルも低いだろう。幸い僕はレベル37のソードマスターだ、その男より活躍した出来るし、どうだろうか」

「え、ええ…」

（コウヤさん、私、あのナルシストっぷりがどうにもダメなんですが…。なんでしょうか、見てると寒気がしてきます。生理的に無理です）

（まあ、実力はあるんだろうけど…、そもそもさ、めぐみんが爆裂魔法しか撃てないの知らないしなあ…）

まあ、それについては知らなくても仕方ないのだろう。爆裂魔法しか撃てない才能に溢れたアーケュイザードがいるなんて誰も想像しないだろうし。

（どうしましよう、アレ、人の話聞かないタイプですよ…。今も1人でブツブツ喋つてますし）

そう言われて、勇者（仮）の方を見ると俺達が話を聞いていないのは明らかなのに、1人で喋つていた。なにこれ、こわい。

（とりあえず、めぐみんから断つてみてよ）

最悪、めぐみんが爆裂魔法しか撃てないのを相手が知れば…「あの、私コウヤさんとパーティを組んでいるので…」めぐみんにしてはやんわりと断りを入れるが…

「決闘だッ!!」

なんでだよ。

おかしいだろ、なんでこの会話の流れで決闘が出てくるんだよ!!
おまえ、アレか? 遊戯王の世界からやつて来たのか?

こいつ、絶対に決闘者だろ。

「この子は、アークワイザードだ。キミのような男には相応しくない。それに僕は女の子を裸のままにして置くような変態でもない!」

「…ツ」

コイツ…、言わせておけば…。

実力差故に何も出来ない俺が解決案を考えていると…

「ええ、良いでしょ。この決闘、紅魔族最強の爆裂魔法使いのめぐみんが引き受けましょう」

「めぐみんツ!!」

(おい! めぐみん、決闘なんて簡単に受けても良いのかよ!)

(大丈夫ですよ、私の爆裂魔法でのナルシストを吹き飛ばしますので)

それに…

「私の爆裂魔法は最強ですから」

「そうだな…、めぐみんの爆裂魔法は最強だ。

まだ、少ししかめぐみんと一緒に戦えてない俺だけと、分かる。

「じゃあ、めぐみん。頼んだぞ」

「なつ、キミはそんなちいなさ女の子に戦わせるというのか! やつぱりキミは僕と…」

「黙ってください、それ以上言われると怒ります。コウヤさんは確かにまだ弱いですけど、いずれは私と一緒に英雄の道を駆け上がる人です。それに、コウヤさんは私の支えになつてくれてますから」「くつ、でも僕はキミを諦らめた訳じゃない。決闘でもし、キミが勝つたら僕のこの魔剣をあげよう。これは女神様から貰った特別な剣だ。」

女神様…、コイツ転生者か、なら今までの言動にも多少は納得が出
来るな。

「でも、キミが負けたら…」

「そこから先は言わなくていいですよ、勝つのは私ですので。あ、で
も、1つハンデを貰えませんか？私はアーヴィングなので先に魔
法を打たせて欲しいのです」

「わかったよ、キミにハンデをあげよう。でも、容赦はしない」
2人とも離れていてくれ、とキヨウヤが連れの2人を離れた位置に
移動させる。

そして、爆裂魔法を行使するのに十分な距離をめぐみんがとる。
「コウヤさん、行きますよ」

渡したマナタイトを使い、めぐみんは魔力を高めていく。

「紅き黒炎、万界の王」

「天地の法を敷衍すれど、我是万象昇温の理」

「崩壊破壊の別名なり」

「永劫の鉄槌は我がもとに下れ！」

「エクスプロージョン！」

空気が弾けた。

爆発の影響だろう。音が聞こえない。土煙で視界も悪い。

少し時間が経ち、耳が機能を取り戻してからめぐみんに話しかける。

「めぐみん、大丈夫か？」

「大丈夫ですよ、それよりアレを見てください…」

めぐみんの指差す方を見てみると、そこにはボロ切れのような奴がいた。

「見ましたか！ 我が爆裂魔法の威力を!!」

うん、うん。見たし凄かつたしカッコよかつたし最高なんだけどね

?

アレ、死んでないよね？

要約すると、めぐみん全裸卒業に追い剥ぎめぐみん

「コウヤさん、魔剣を持つてさつとかえりますよ」

俺を置いてさつさと丸焦げ勇者の方へ向かっていくめぐみん。

「ちよ、ちよっと!! めぐみん待ってくれ!」

これだけは…。

これだけは…、言わなくてはならない。

「どうしたんですか?」

「めぐみん。服」

その言葉を聞いて、あ、と口を開けためぐみん。

そう。めぐみんは前話は全裸だつたのだ。

現丸焦げ勇者と対峙する時も。

エクスプロージョンを撃つ時も。

全裸だつたのだ。

大事な事だし2度言おう。

全裸だつたのだ。

「ど、どうして早く言つてくれなかつですか!!」

顔を真っ赤にして怒るめぐみん。まあ無理もない。お外で見知らぬ変態ナルリストに全裸を晒していたのだから。

めぐみんの乙女な部分が許さなかつたのだろう。

まあ、男でも怒るけど。

「いや、仕方ないだろ。服も乾いてなかつたしさ、あの状況じや言い難かつたんだよ。めぐみんがカツコイイこと言い出すしゃ」

カツコイイ、と言う言葉に反応して顔を赤くするめぐみん。

「カ、カツコイイですか…」

全裸で顔を赤くしてるめぐみんかわいいよ。

まるで…（ry

おつと、このままめぐみんを愛でるのもいいんだが、いい加減何か着せてあげなければ。元來ていた服はまだ乾いていないし、コートでも着せてあげようか。

ほい、とめぐみんにコートを脱いで渡す。俺の体温で温まつててめぐみんの素肌にも優しいはずだ。

「あ、ありがとうございます」

受け取ったコートを早速着るめぐみん。俺との身長差がかなりある為、コートの裾が素足をほぼ隠してしまっているのが可愛らしい。

彼Tシャツならぬ、彼コートってやつか。

：彼Tシャツってさ、そんなにエッチな感じしないのに、どうして彼コートなめぐみんはエッチな感じがするんだろうか。

あ、中身が全裸だからだ。

俺☆天才☆

さて、めぐみんに貸したコートはあとでhshsするとして…、丸焦げ勇者はどうしようか。

前にぶっ殺すとか言つてたけどさ？今の状況を冷静なつてみると、じ輝きを灯しているのが痛々しい。

特に、鎧や身体はボロきれの用で真っ黒なのに、魔剣だけ以前と同じ輝きを灯しているのが痛々しい。

：少し自分でも引いてる。

やつたのは自分ではないが。

それにもしても、堂々と戦利品として魔剣を取りに行くめぐみん。もしかしてかなりメンタルが強いのではないのだろうか？

コートをはためかせながら魔剣を取りに行くめぐみんを見て、俺はそんな事を考えていた。

「見てください!!コウヤさん!!この魔剣カツコイイですよ!!どうしましようか!」

かなりのハイテンションで魔剣を持つてきためぐみんはそのままのテンションで俺に話かける。

その様子は、小さな子がずっと欲しかったおもちゃを手に入れる事が出来たときのよう。

「んー、どうするつて。めぐみんが剣を使えるならめぐみんが使うとか?俺は全然だしなあ…」

「うつ…、私も使えませんね…。体術などはからつきしですし…」
ゆんゆんなら何とかなるかもしれないですね…、と考え込むめぐみん。

「…売るとかはどうだろうか。家の資金にもなるかもしれないし」「でも買い取ってくれるでしょうか、あのナルシスト野郎、女神様がどうとか言つてましたし、それが本当ならこれ、神器ですよ。買い取れる所があるか分かりませんよ?」

「あー、そつかあー。この剣お荷物になるかもしれないな」
こんななんなら、金でも要求しておけば良かつたと後悔する俺達。
すると、めぐみんが名案を閃いたと言うふうにいきなり顔をカバつとあげる。

「コウヤさん!!名案を思いつきましたよ!!」

「名案?」

めぐみんの事を信用していない訳ではないが、何か、嫌な予感がする。

「この剣置いてきて、有り金むしり取りましよう
どうやら嫌な予感は的中したようだ。

いつの間にか追い剥ぎみたいになつてしまつためぐみん。

将来が心配です。

ま、将来は責任持つけど。

「なあ、めぐみんどうしてそんな事思い付いたんだ？」

「この魔剣は女神様から貰つた物みたいですし、換えの効かない魔剣より、稼げば再び手に入るお金の方が嬉しいでしよう」

⋮まあ、まさか、その通りなんだろうけど⋮。

なんだろう。この違和感。

「なあ、めぐみん、交換はまあいいとして⋮。あの二人組はどこに行つたんだ？姿が見えないが」

あの2人とは、丸焦げ勇者にくつついていた女2人のことだ。めぐみんがエクスプロージョンを撃つた後から姿が見えないのだ。

「あ、あの二人組ですか、どうやら私の爆裂魔法に恐れをなして逃げたようですね」

さすがめぐみん。

さすめぐ!!

「じゃあ、私身ぐるみ剥いでくるんで、コウヤさんは待つててくださいね」

そう言つて再びスタスターと、向こうへ行くめぐみん。

⋮身ぐるみ剥ぐつて⋮。

⋮なんかさ、めぐみんつて少しワイルドつてか、タフな所あるよね。めぐみんの魅力をまた1つ見つけられた1日だつた。

「コウヤさん」

めぐみんが向こう側から大声で呼ぶ。

「どうしたー」

俺も大声で返す。

「コイツ全然お金持つてないですよー」

「
？」

：

要約すると、魔剣の代わりに家を買わせる話。家を買う男その1。

勇者（笑）との一方的な対決が終わって数日、俺達は珍しくアクセルの街の冒険者ギルドでダラダラしていた。

手に魔剣グラムを持つて。

そう、結局あの後全くお金を持っていなかつたのでめぐみんが約束通りに魔剣を奪ってきたのだ。

魔剣をゲットした事で得をしたかと言うとそんな事はは無い。

魔剣グラムの能力は貰つた本人しか使えないのに店に売つても安いから売るのは割に合わない。

剣が手に入つたので練習をしてみようかと思つてやつてみたが断念。

全くと言つていいほど才能がなかつた。

女神から授けられた神器「魔剣グラム」は自分立ちにとつて完全にお荷物だつた。

重いし。

「なあ、めぐみん。今日は爆裂魔法を撃たなくて本当に良いのか？」
いつもの様に馬小屋でラツキースケベ（不可抗力ではない）を堪能しつつ起きると、めぐみんがこう言つたのだ。

「コウヤさん、今日はギルドでのんびりしまよう」と

当然驚いた。

あのめぐみんが!!
あのめぐみんが!!

「ギルドでのんびりしまよう」なんて絶対に言わないであろう事を言つたのだから。

もちろん、熱が無いかや体調が悪くないか、アノ日じや無いかをめぐみんに確認した（何故か叩かれた）がそんな事は無く全くの元気。のんびりする理由を聞いてみると、「秘密です」とはぐらかされ結構そのまま今に至る、と。

まあ、これはこれでいいんだけどね？

めぐみん眺めるの最高だし。

めぐみん可愛いし。

可愛いし!!

と、のんびりめぐみんを眺めていると、ギルドの扉が開く音がした。今の時間、皆はクエストで出払っていて居ないので扉が開くのは珍しいと扉の方を向くと、見た事のある奴がいた。

具体的に言うと勇者（笑）。

「は？」

あ、思わず声が出てしまった。勇者（笑）の方を見ると勇者（笑）もこちらを見てくる。

……。

目が合つた。

俺を見つめてくる、勇者（笑）の顔が何故か綻ぶ。

ホモかよコイツ。

どうした物かとめぐみんを見ると、めぐみんはいつの間にか魔剣を俺から奪い、勇者（笑）を見てニヤニヤしていた。

「はあ…、はあ。キミたち、そこに居たのか」

勇者（笑）がこちらに駆け寄つてくる、どうやら俺達を探していたみたいだ。

また、めぐみんを勧誘しに来たのだろうか、断つて爆裂魔法を撃ち込んだのに。

「なあ、勝負はついたよな？また強引に引き抜きをするつもりか？」

勇者（笑）に言うと意外な事に否定する。

「ち、違うんだ!! 勝負には負けた訳だし、キミたちの噂は聞いて仲が良くて、僕の考えていた様なことは全く無いのも分かつたんだ！」

なら、何故来た、と言おうとすると…：

「コレ」が目的ですね？」

めぐみんが魔剣を抱えて勇者（笑）に言つた。

「そ、そうだ!! その魔剣を返して欲しいんだ!!」

「は？」

何都合のいい事言つてるんだコイツは…。

「勘違いして突つかかって勝負に負けた僕にこんな事を言う資格がないのは分かつて、でもその魔剣は僕にしか使えない女神アクア様から直々に頂いた魔剣なんだ」

なら、何故賭けの対象に？

「な、なあ、アンタ…」

「あー、えっと、コレを返して欲しいんですよね？」

「めぐみん!」

いきなりの返却宣言にびっくりする俺。確かに魔剣は必要無いものだが返す必要も無い。

「か、返してくれるのか!?」

思わず言葉に泣きそうになる勇者（笑）。

「ええ！返しても良いですが、条件があります」

「あ、ああ。元よりタダで帰つてくるとは思つてないさ、僕に出来ることなら何でもするよ」

ん、今何でもす（ry

「ふふ、今何でもするつて言いましたね？」

めぐみん…。

…いや、何でもない。

「ああ、だから何でも言つて欲しい。で、でも。僕と一緒にいた子達には手を出さないで欲しいんだ」

「大丈夫ですよ。コレを返す条件は…」

「じょ、条件は？」

…なんでめぐみんは焦らすの？

「私達に家を買つてもらいいます!!」

「い、家!?」

あ、ヤバ。勇者（笑）と声が被つちやつた。なんか屈辱。

「ええ、私達が馬小屋で暮らしてるのは知つてますよね、だから買ってもらいたいのです」

……、スゲー暴論。馬小屋暮ししてのを知つてるから家を買えて、現代社会なら分からぬもないが、一般的な冒険者が馬小屋なの

を考えると異常な発言だな。

勇者（笑）の顔を見てみると少し、笑顔が引きつってる。

…まあ、無理もない。

「い、家か…。何でもって言つたし、ま、まあ良いけど。どんなのが良いのか決まつてるのでかい？」

「ええ、勿論です。あ、あと家具もお願ひしますね」

「あ、アハハ…」

壊れたように笑う勇者（笑）。
少し同情する。

それにしてもコイツの金は足りるのだろうか、この世界にローンはないという。家も家具も一括で買うしか無いのだ。いかに高レベル冒険者と言えども一括で全て買うは難しいのでは無いのか？

めぐみんに聞いてみると…？

「ああ、その事は大丈夫です。足りなかつたら働かせるので」

可愛らしい顔で恐ろしい事を言うめぐみん。

日本のブラック企業を知るものとしては、ものすごく恐ろしく感じた。

要約すると、魔剣の代わりに家を買わせる話。家を買う男その2と、ベルデイアの見せ場。

結論から言おう。

家は買った。

でも、未だ馬小屋暮らし。

何故かつて？

それはねーー

魔剣の代わりに家を買わせることになつた訳だが…。
少々面倒なことになつた。

「あ、あのさ…、本当にこれを買うのかい？」

「もちろんですよ、魔剣に比べれば安いですし」

今、いるのは元の世界で言う不動産屋のような所。この街で1番の
物件を扱つてると噂の場所だ。

そして、買うのも1番の物件。アクセルの町外れにある、大きな古
城だ。

え、なんで城を買おうってことになつたのかつて？

めぐみんが、「爆裂魔法を存分に撃てる家が良いです！」と言つたか
らだ。

勿論、反対したぜ？想像出来る家の規模からして勇者君が可愛そ
うだし、維持できるのかつてね。

ま、結果は今ここに居る時点でお察しだな。

「なあ、めぐみんさ、この城やたらと安くないか？」

「え、そうですか？値段を見てなかつたのでわからないです」

…めぐみんよ。いや、何も言うまい。

「なあ、勇者君、この値段どう思う？」

「あの、僕には、ミツルギ キヨウヤと言う名前があるんですが…」

「どうでもいいんだが、これを見た感想が欲しいんだが」「すぐく…、安いです」

「だよなあ」

怪しい…。城っていうのは普通の物件とは違い、ボロボロの廃墟でもかなりの値段がする。城であるという事に大きな価値が発生するからだ。それにあてはまる城が安いって事は…。

「なあ、めぐみんさ、やっぱり他の奴買わないか？これさ、ぜつたい訳ありだし」

「何を言つてるんですか？せつかくタダで家が手に入ると言うのに他のに変えようなんで思いませんよ」

だよなあ…。爆裂魔法が存分に撃てるし、城と言うのがめぐみんの琴線に触れてるし。

まあ、何とかなるか。最強の爆裂魔法もある訳だし。

…どうにかならなかつたよ…。

なんで我が家（予定）に魔王軍幹部がいるんですかねえ！

——俺とめぐみんは勇者君を連れて購入した城へ行つたんだ。結構な距離を3人で歩き辿り着いた城。そこからは明らかに邪悪と言つたオーラが漂つていたんだ。

「こ、このオーラは…」

城から漂う邪悪なオーラに真っ先に反応したのは勇者だつた。「なあ、めぐみんさ、今からでも帰らないか？」

「いえ、帰りませんよ！さあ！私たちで城にいる不届き者を倒してしまいましょう！」

そして入つた城の中。そこには——

——首のない騎士。

デュラハンが居た。

「ほう……」まで来ると、この街の冒険者にも優秀な者が居るのだな

言葉と共にデュラハンから発せられる壮絶オーラに屈せず、ミツルギが話しかける。

「貴様、そのオーラ…、只者では無いな？」

「フツ…、よくぞ気付いたアクセルの冒険者よ！ 我が名はベルディア！ 魔王軍幹部ベルディアだ！」

「な、ベルディアだと！ どうしてこんな辺境の街に…」

ベルディア？ 誰だ？

「魔王様から特命を受けてな。さて、勇敢なる冒険者達よ！ 元とは言え、俺も騎士だ。無益な殺生は好まん。このまま帰ると言うなら見逃すが？」

「舐めるな！ 貴様の様な者をここで見逃す訳が無いだろう！ ベルディア！ 貴様は僕がここで倒す！」

「な、勇者君、返すつて言つてくれるしさ、帰ろ「待つてください！」 めぐみん！ 嫌な予感がするからやめて！」

「そこの勇者、魔王軍幹部、ベルディアを倒すのは紅魔族1の魔法使い！ めぐみんです！」

うん、やっぱりだよなあ。めぐみん我慢出来なかつたか…。

「さあ！ ベルディアよ、我が一撃喰らうがいい！ エクスプ…むぐう！」

隣にいるめぐみんから、魔力が高まるのを感じ急いで口を塞ぐ。

「つぶはあ！ いきなり何をするんですか！」

「それはこつちのセリフだよ！ こんな所で撃つたら皆死ぬだろうが

！」

「う、それはそうですが…」

「死んだら、爆裂魔法極められないぞ？」

「うう、それを言われると…。分かりました。今は引きます。ですが！ 次はありませんよ！」

ふう、取り敢えずめぐみんはこれで大丈夫。あとは勇者君だけだ。

「おい、勇者君、お前も帰るぞ」

「な、待つてくれ！コイツは今ここで倒さないと…」

「倒さなくてもいいだろ！そう言うのは俺達が居ない時にやつてくれ！こんな所で死にたくないんだよ！」

「で、でも…」

「でもじやねえよ！戦うにしても準備した方がいいだろ！」

「た、確かに…。分かった。今は引こう

よし、勇者君も何とかなった。

「じゃ、帰るぞ」

「なあ、めぐみんよ。やっぱり別の家を買った方が良くないか？」
「そうですか？」

魔王軍幹部を間近で見たと言うのに、ケロッとしているめぐみん。

それに比べて勇者君は、かなり焦つたような表情をしていた。

「二人とも、僕は街に着いたら一旦王都へ行くところにするよ

「なんで王都へ？」

「魔王軍幹部がここに居ることを王都に報告しなきゃ行けないから
ね」

「次回予告」

トラクターをトラックと間違えてショック死した、ヒキニートの青年カズマ。死んだはずの彼は転生の間で青く澄んだ水の様な美しさを持つ女神アクアに出会う。

なんと美しい女神アグニはカブトを済得りの異世界轉生させてくれるようだ！

転生の特典として青年カズマが選んだ物とは！
そして、関係なしに唐突に繰り広げられるめぐみんとのイチャイ
チヤ！

次回！「めぐみんぺろぺろ」

※カズマ君とは出会つてないだけで、コウヤが転生した後にこちらに来ています。